2018年JAF全日本ジムカーナ選手権第10戦　淀ハイスピードジムカーナ鈴鹿大会［JAF公認No.2018-3121］

開催日：9月29～30日　開催場所：鈴鹿サーキット国際南コース　格式：国内　主催：チーム淀［クラブ登録No.公認27001］

フォト／野澤廣幸　レポート／太田進之介

タイトル獲得のためには優勝が必須となる茅野成樹選手。昨年に続いてPN4クラスでタイトルを確定させた。

雨天１本勝負を制した茅野成樹選手が逆転チャンピオンを確定！

鈴鹿南コースで第10戦の開催を迎えた全日本ジムカーナ選手権の最終戦は、PN4とSA2の２クラスでのタイトル争いが焦点になった。

この週末は全国的に台風24号の影響が懸念され、土曜の公開練習から天候は雨。日曜の本番に向けて大荒れの状況が予想されたことから、土曜終わりのドライバーズブリーフィングでは主催者とエントラントの協議により「日曜は午前１ヒートのみ開催の１本勝負」とすることで合意。鈴鹿市周辺地域に避難勧告が発令された際にはイベント開催そのものを再協議するという、チャンピオン争いにさらなる緊張感を与える気象条件となった。

日曜当日に設定されたコースは、ホームストレートを発進しS字をクリアするまでは前日と同様ながら、テクニカルセクションに規制パイロンを置いて左に回り込んでからの180°という新たなターンを追加。それ以外はトラックレイアウトを活かしてショートカットを立ち上がり奥のヘアピンへと加速し、再びショートカットをクリアして最終コーナー手前のフィニッシュラインへと向かう、１分フラット～１分10秒台の超ハイスピードな設定となった。

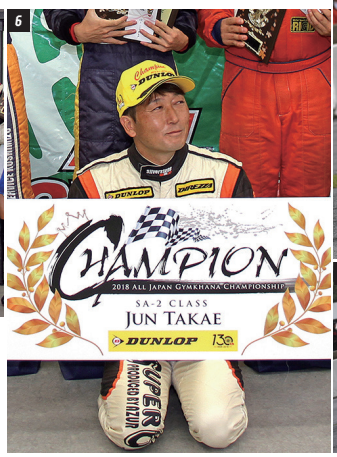
朝のうちはコース上で何とかこらえていた雨が、注目のPN4クラス開始を前に本格的な降雨となり、ハイパワー4WDのランサーをどう御するかが勝負の争点に。

前日の公開練習でも火花を散らした茅野成樹選手と野島孝宏選手の両者は、土曜１本目に大きくスライドするマシンに苦労しながら互いに譲らず、100分の６秒という僅差。しかし雨量の増えた２本目にはランク首位の野島選手がライバルを1.2秒引き離すタイムを記録し、３連勝中の茅野選手に大きくプレッシャーを掛けていた。

そんな状況で日曜１本勝負のスタートを切ったラス前ゼッケンの茅野選手は、優勝が逆転タイトルへの最低条件となるだけに「行かないと勝てない」との言葉通り、スタートで抜群の蹴り出しを決め、１コーナーまで気合を感じさせるダッシュで突っ込んでいく。

しかし、このブレーキングから進入の感触で「滑った」と感じた茅野選手は、他クラスの選手からヒアリングした最新の路面状況を踏まえ「ストレート一番奥の左コーナー（ターン3）はとにかく滑るし、S字なんかはコーナリングしようとすると必ずリアが出る」と警戒し、「アプローチを変えて」マシンをなるべくまっすぐ保

PN4／**1.**第４戦までなかなか勝利に恵まれなかった茅野選手だったが、第６戦から怒涛の４連勝を飾ってタイトルを獲得した。**2.**グリップに悩まされてコンマ８秒差の悔しい２位となった野島孝宏選手。**3.**上位２人のタイムから３秒ほど開いたが、佐々木雄史選手が３位に入賞で今季２回目の表彰台。**4.**PN4クラス入賞者の皆さん。



SA2 ／ **5.**SA2クラス入賞者の皆さん。**6.** 初タイトルがかかるプレッシャーで実力を存分に発揮できなかった高江淳選手だが、無事にタイトルを沖縄へ持ち帰ることができた。**7.** 激しいタイトル争いの2人をよそに、一歩抜きん出たシュン選手が初優勝をもぎ取った。**8.** 朝山崇選手はあと少し届かず2位。**9.**3位はベテランの山越義昌選手。

つよう姿勢を整え、慎重かつ冷静にコースを攻略。39秒175の中間ベストでショートカットを立ち上がると、明らかに高い車速を維持したままフィニッシュラインへ突入。この時点でオーバーラップスタートを切っていた野島選手の走りとタイムを見守ることに。

茅野選手同様、スライドしたがるマシンを抑え込んでランサーを走らせた野島選手だが、「昨日からウエットの感触は良く、いける手応えはあったんですけど、なぜか今日は全然グリップしなくて……」と、フロントノーズが入ってくれない。

すると中間を茅野選手からコンマ5秒遅れで通過したコース奥へアピンからの立ち上がりで、マシンがわずかにスライド。この一瞬のアクションが勝負を分ける結果となった。

「ヘアピンではアンダーが出て、そうするとどうしても立ち上がりで踏んでオーバーになりますし。僕の場合はエアを上げてもそんなに感触が良くなかったんです」と肩を落とした野島選手は、茅野選手の1分01秒035に対しコンマ8差の2番手タイムに。これで茅野選手が“上がり4連勝”での大逆転チャンピオンを獲得した。

「土曜1本目は1.6kgf／㎠、2本目は思い切り上げて3.5kgf／㎠と、どのエア圧が今日に向けて合いそうかテストしてました。1本目はズルズルで、2本目は手応えが良かった。でも全部のコーナーでコンマ1ずつ負けていて、結局1.2秒も離された。何がいけないかと言えば、自分の感覚がリミッターを当てているんだと気づいたんです」と、勝因を分析するのは、自身10度目の全日本タイトルを手にした茅野選手。

「ということは、エア圧に対して体が勝手に反応して“無理だ”と言っている。それといろんな人の情報を聞きながら、エアを1.8kgf/㎠まで戻す判断をしました」

「今年はシーズン前半、自分のミスも重なったし完敗もありましたけど、残りは開き直って走ることができた。本来はコースジムカーナが得意なんですが(後半戦に集中したパイロンコースで連勝し)『パイロンも上手くなったやん！』なんて(笑)。この年齢になってもまだ伸び代があって、天狗になっちゃいけないな、と。やはり精神の成長がすごく大きかったですし、自分的には大満足のシーズンです」と、メンタル面での成果を強調するタイトル獲得劇となった。

そして王座争いを繰り広げるもうひとつのクラス、SA2はここまで4勝を挙げランキング首位で最終戦に臨んだ沖縄の星、高江淳選手と地元の佐藤巧選手による一騎打ち。

前日練習走行1本目で高江選手がコースオフしてエンジンストールで赤旗。続く佐藤選手もスピンを喫するなど、ともにプレッシャーとの戦いを強いられると、2本目でもトップ10に絡めず初タイトルに向けた重圧の大きさを感じさせる展開に。

PN1 ／ **10.** クラス唯一の1分08秒台を叩き出した多田安男選手が堂々の1位。ベテラン健在をアピール。**11.**2位は米澤匠選手。**12.** 深川敬暢選手が3位。**13.**PN1クラス入賞者の皆さん。

PN2 ／ **14.** 優勝は公開練習からの好調をそのまま維持してしてパイロンターンも見事に寄せた稲木亨選手。**15.** 松本敏選手が2位。**16.**3位は土手啓二朗選手。**17.**PN2クラス入賞者の皆さん。

PN3 ／ **18.**PN3クラス入賞者の皆さん。**19.** 最多の21台がエントリーする中、ユウ選手が1分06秒293で1位を獲得して8連勝でシーズンを終えた。**20.**2位は西野洋平選手。**21.** 川北忠選手が3位。

SA1 ／ **22.**「ミスさえしなければ行けると確信した」と言う安木美徳選手が、悲願の全日本初優勝を飾った。**23.**2位は橋本克紀選手。**24.**3位は志村雅紀選手。**25.**SA1クラス入賞者の皆さん。

SA3 ／ **26.**SA3クラス入賞者の皆さん。**27.**見事1位を獲得したのは、NSX同士の対決を制した西森顕選手で、今季3回目の優勝となった。**28.**2位は渡辺公選手。**29.**久保真吾選手は3位。

SA4 ／ **30.**すでにチャンピオンを決めている津川信次選手が、オーバーオールウィンとなる1分00秒822で完勝。**31.**飯坂忠司選手が2位。**32.**3位は菱井将文選手。**33.**SA4クラス入賞者の皆さん。

SC ／ **34.**SCクラス入賞者の皆さん。**35.**クラス2年連続で通算9度目のチャンピオンとなった西原正樹選手が優勝で今シーズンを終えた。**36.**高橋和浩選手が2位。**37.**野尻隆司選手が3位。

本番1本勝負という“追い打ち”もあり、2人の対決に注目が集まる中、まずは東京からエントリーの中団ゼッケンスタート、ニュートンランド所属のシュン選手が中間41秒664の好タイムを刻んで1分04秒945とベスト更新。これがターゲットとなる中、今季もタイトル争いを展開した昨季王者の朝山崇選手が見事なターンを決めるも、わずかに及ばず。いよいよ高江選手が満を持してのスタートを切っていく。しかし……。

「あ、1コーナー抑えてたのバレてました？『まだリアが出るんだ～』と思ってちょっとビビってしまって(笑)」、そこから流れが乱れると、ターン3から戻りのS字でもわずかにリアが流れて、最後の右コーナーとなる縁石に乗り上げるあわやの場面も。

「本当にヤバいと思って、次のパイロンターンの時もそんな余裕ないのに、ずっとミラーで脱輪の旗が上がってないか見てました」と、気もそぞろのアタックに。後半は「もう気にしない」と切り替え思い切りアタックしたものの、中間42秒750とフィニッシュタイム1分06秒648のいずれも暫定7番手タイム止まりに。

その高江選手に対し、こちらもPN4同様「勝利」が逆転タイトルへの条件となる佐藤選手は絶妙なサイドターンを決めて41秒453の中間ベストを刻み、劇的な逆転チャンピオン獲得か……と思われたが、ゴールタイムはまさかの1分05秒078と4番手。この瞬間、高江選手が初の全日本チャンピオンを獲得。そしてラストゼッケンの澤平直樹選手がターン3でコースオフを喫した瞬間に、シュン選手の全日本初優勝が決まった。

「佐藤君の中間ベストが聞こえていたんで心配だったんですが、ホッとしました(笑)。昨日の1本目は前後3kgf／㎠までエアを上げていてイケイケで行ったんですけど、はみ出しちゃって。だから2本目は一気に下げて、最初からあのエア圧で挙動を掴んでいれば良かったんですよね」と、フィニッシュ直後には安堵と苦笑いの表情を浮かべた高江選手。

「コースオフしたはずみでバッテリーが死んじゃったみたいで、急遽ホームセンターで新品を調達したんですけど、それもなんか空っぽで、あわてて充電して(笑)。ものすごく流れが悪かったですよね」

「選手権首位で最終戦なんて今まで経験したことのない感覚でしたし、普段はお酒好きでもシーズンでは前日飲まないようにしてたんです。でも昨日は逆に飲んで忘れようと。そしたらこれが飲んでも飲んでも、全然酔えないんです(笑)。それじゃ早く寝ようと思ったら夜中の3時頃に目が覚めたりして」

「最後は本当にダサい終わり方でしたけど、ここまでシーズン4勝だから文句なしです。沖縄に全日本チャンピオンを持って帰れますし早く報告したいんですけど、今は(台風の影響で)基地局が止まったのか携帯が繋がらなくて。家族とも連絡が取れなくて家がどうなってるかも分からないし、県知事選の状況も聞けてないんです」と最後は地元を気遣った高江選手は、最終的には脱輪2本の判定で11位までドロップしながらの初戴冠となった。

一方、敗れた地元・愛知の佐藤選手も「ターン手前で姿勢が乱れて、なんとか挽回しなきゃ」と気持ちが焦った結果、ショートカット立ち上がりで踏みすぎホイールスピン。寸でのところで逆転タイトルがその手から転がり落ちていった。

「でも、今年はタイトル争いができて大きな自信になりました。第2戦のTAMADAで大敗したのをキッカケに『何かを変えなきゃ』と、セッティングを見直してリアが動く方向にトライしました。そこから安定してタイムが出て成績も残せるようになったので、チャンピオンを争えた実感はありますね」と、満足した表情。双方ともに成果を手に入れ、初王座を巡る初々しくも清々しいシーズンフィナーレとなった。